

持続可能な開発のための教育 (ESD) としての 高校地理の学習内容について

和田 文雄

本小論は、ESDとしての高校地理の学習内容を、実践の視点からいくつかの留意点についての検討により高校地理へのESD導入の意義を明らかにすることを目的とする。地球的課題を学習内容とする高校地理は学校教育におけるESDの主要な教科である。ESDとしての高校地理は、生徒が地球的課題の克服を目指してその要因を探究する。そのためにはグローバル化の問題点を取り上げるべきである。環境問題は自然地理学習の重要性の再確認ともなる。さらに地域調査の実践はその学習の課題を克服する契機ともなっている。

Keywords : 持続可能な開発のための教育, 地球的課題, 高校地理, グローバリゼーション, 地域調査

1. はじめに

持続可能な開発のための教育 (以下、ESDと表記) は学校教育においても重要な普遍的な教育であり、その正しく適切な実践が求められている。しかし、教育現場においては「ESDは難しい」「ESDはよくわからない」という意見が多く、その実践も一部に限られている。仮に、指導者がESDの実践であるとしても、それが疑問に思われるものや明らかにESDといえないものも散見される。

この理由にはいくつか考えられるが、その一つにESDとしての学習内容が授業者に明確に認識されていない、すなわち、ESDは何についての学習なのか、といった基本的なことが明確にされてない、ということがあげられる。これは本小論で取り上げる高校地理においてもあてはまる。ESDに関して、その学習方法や評価についての理論および実践に関する研究も大切であるが、まずはESDとしての学習内容を明確にすることが肝要であると考えられる。

本小論では、高校地理を取り上げ、そのESDとしての学習内容を実践の視点からいくつかの留意点について検討することを通して、それを明確にすることで高校地理へのESD導入の意義を明らかにすることを目的とする。これはESDとしての高校地理の教材研究のスタートにあたり、学習内容として何を取り上げるべきか、さらには新たな指導案の作成もしくは指導案改善の手がかりになる。本小論に

おいては、持続可能な開発の概念とESDの学習内容を整理する。そして、それをふまえ、ESDとしての高校地理の学習内容を明確にするために必要ないくつかの留意点について検討し、高校地理へのESD導入の意義を明らかにする。

2. 持続可能な開発の概念とESDの学習内容

1) 持続可能な開発の概念について

持続可能な開発 (以下、SDと表記) の概念は、国連の「世界環境開発委員会」が、1987年の総会に宛てた報告書『我ら共通の未来』において示したのが最初である。その概念規定は、「(SDとは) 将来の世代のニーズを満たす能力を損うことなく、現在の世代のニーズを満たす開発をいう」である。

この概念規定には、ニーズ (必要なもの) と限界の二つの重要な内容が含まれている。ニーズとは、とりわけ世界の貧しい人々にとって最優先されるべき不可欠のニーズである。限界は、現在と将来の世代のニーズに見合う環境の許容能力という考え方であり、その許容能力は技術と社会組織により負わされた限度である。この概念は、開発が地球環境を維持しうる範囲内で行われるべきである、という考えに基づくものである。SDの概念は、その後、国連でのいくつかの取り組みにおける議論の過程で先進国と発展途上国の対立および、それを環境問題のみに限定すべきではない、という内容の拡がりをみせ、

多義的な意味内容を有するようになった¹⁾。すなわち、先進国が進めてきた開発は、発展途上国を含む世界のすべての人々に人間らしい生活、例えば衣食住・教育・福利厚生等をもたらさないだけでなく、将来の世代がその能力を発揮するために必要な資源も残せない。したがって、これからの開発は、経済開発だけでなく、健康・教育・福祉の充実、文化振興、公平性の向上などの社会開発がなされ、さらに環境保全とのバランスもとらなければならない、と説明できよう。SDの概念が示すこの内容は、ESDの指導にあたり指導者が、常に確認すべきである。

2) ESDの学習内容について

(1) ESDの目標と特色

国連ESDの10年²⁾ (以下、UNDESDと表記) を提唱し、ESDを主導した国際連合教育科学文化機関 (以下、ユネスコと表記) は、その「国際実施計画」³⁾ (以下、IISと表記) において、ESDの目標を、「すべての人が質の高い教育の恩恵を享受し、持続可能な開発のために求められる原則、価値観及び行動が、あらゆる教育や学びの場に取り込まれ、環境、経済、社会の面において持続可能な将来が実現できるような行動の変革をもたらすことであり、その結果として持続可能な社会への変革を実現する」とした。

IISは、「ESDは新しい教育ではない。ESDで取り上げるテーマ・活動は必ずしも新しいものではなく、それらをESDという視点からとらえなおすことにより、個別分野の取り組みに持続可能な社会の構築という共通の目標を与え、具体的な活動の展開に明確な方向付けをするものである⁴⁾」とした。これを学校教育にあてはめれば、「すべての教科等⁵⁾ においてESDの視点に立った学習指導を展開することが大切である。つまり、学習目標や内容をESDの視点と関連付けたり、ESDの視点から見直すことにESDの意義がある⁶⁾」となる。

ESDが取り組む学習テーマについて、IISは、地球の持続可能性に関わる世界規模の課題 (以下、地球的課題と表記) を理解し、それに取り組むことが、ESDの中心である。地球的課題は、持続可能な開発の3つの領域である環境、社会、経済から生じている。雇用、人権、男女平等、平和、人間の安全などの社会問題と同様に、水や廃棄物といった環境問題はすべての国に影響を及ぼす。また、あらゆる国々が、貧困削減、企業の責任とアカウンタビリティのような経済問題にも取り組まなければならない。HIV/AIDS、移住、気候変動、都市化など世界中の関心を集める主要な課題は、持続可能性の3つの

領域において、複数の領域に関わっている⁷⁾」としている。ESDとしての高校地理の学習内容は、これらの地球的課題を地理的視点から検討し取り上げることになる。

(2) 「持続可能な開発目標」について

IISの目標には、重要な留意点が明記されていた。それは、ESDの取り組みを通して「ミレニアム開発目標 (2000-15年)⁸⁾ (以下、MDGsと表記)」が達成できるよう各国を支援する、というものである。この目標は、世界にESDを広めるための前提として、世界から極度の貧困と飢餓をなくすことを最大の目標とし、普遍的基礎教育の達成、男女差別の解消、乳児死亡率の低下などを目指すものであった。MDGsは、UNDESD以降、国連「持続可能な開発目標 (以下、SDGsと表記) 2015-30年」に引き継がれた。SDGsは、ESDを推進し平和で持続可能な社会を創るための具体的な目標である。それは、世界の全ての地域・人びとの課題である貧困と飢餓の克服と持続可能な農業の促進、すべての人々の健康的な生活の確保と福祉の促進など、17項目から成っている⁹⁾。

IISを受けて定められた我が国のESDの指針が「我が国における「国連ESD10年」実施計画 (2006年、2011年改訂)¹⁰⁾ (以下、「ESD実施計画」と表記) である。この計画は、ESDの学習内容について、計画書の冒頭で、自然との共生を考えた防災がSDに必要である、とした。取り組むべき分野としては、開発途上国が、貧困撲滅を最優先の課題とし、持続的成長、人権、個々人の生活水準と福祉の向上および人間の安全保障の実現等が緊急の課題である。先進国は、環境保全、人権や平和等の社会的な課題、貧困等の経済的課題について、グローバルな視点から取り組むことが必要である。この中で優先的な課題は資源の過剰利用の抑制や環境の保全等である。そして気候変動や生物多様性などの分野に焦点化を図ること、としている。

UNDESDの終了後、その後継プログラムとしてユネスコが推進しているのがESDに関するグローバル・アクション・プログラム (2015-30年) (以下、GAPと表記) である。GAPの全体目標は持続可能な開発を加速するために教育・学習の全ての段階・分野で行動を起こし強化するである。ユネスコは、2015年以降この目標に基づくESDの取り組みを推進している。

3. ESDとしての高校地理の学習内容

1) ESDとしての高校地理のESDにおける位置付け
地理教育の学会はESDを高く評価している。そ

れを具体的に表明したのが、ESDとしての地理教育の理念を提唱した「持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言¹¹⁾（以下、ルツェルン宣言と表記）」である。同宣言はSDを、①未来を指向する、②人間と自然の調和の概念であり、③世代、国家、文化、地域の間における公正の概念である。それは④社会的、環境的、経済的な問題に加え、世界的な責任と政治参画にまで拡がる、とし、これをすべてのレベル、すべての地域において地理教育に盛り込むべきである、と主張する。その根拠としてIISのほとんどの「行動テーマ」が地理的である¹²⁾、としている。

ルツェルン宣言は（ESDとしての）地理的テーマ設定の基準を以下のように説明する。

（地球的課題には）適切な空間行動と持続可能な行動といった、人間と自然に関する問題が含まれる。そして地球温暖化、エネルギー枯渇、再生不能資源の濫用、人口変動そして世界的な不公平の問題を取り上げるべきである。とりわけ環境的、経済的、社会的な持続可能性に関し相矛盾するテーマを取り上げて考察させる学習は重要である¹³⁾、としている。

次に、現行学習指導要領高校地理にESDがどのように導入され、位置付けられているかを学習内容に焦点をあてて整理する。地理Aの目標の一つは、「現代世界の地理的認識」の深化である。これは学習指導要領解説¹⁴⁾によると「現代世界の諸課題の地理的考察により深めるもので、地域性を踏まえた取組や国際協力によってその解決に取り組むことで、持続可能な社会の構築を旨とすることが強く求められている」と説明されている。その中心的な学習が、大項目(1)「現代世界の特色と諸課題の地理的考察」の中項目地球的課題の地理的考察である。また地理Bの大項目(2)「現代世界の系統地理的考察」は、地球的諸課題を理解し、持続可能な社会を実現するために人々が、国や地域を越えて協力して地球的諸課題の解決に取り組んでいる姿を認識させることを目標としている。これらは、IISに示されたESDの目標である地球的課題の理解とその解決への取り組みと一致する。

そして、地理Aにおいて、ローカルスケール（生活圏）の導入や文化の多様性の重視、さらには地理A、地理Bともに社会参画を探究学習の目標に含めていることは、ESDとしての高校地理を明確にめざしたものである。以上から、ESDとしての高校地理はESDの主要な教科であるといえる¹⁵⁾。

なお、地理Aは地球的課題として、環境、資源・エネルギー、人口、食料及び居住、都市問題、自然災害に対する防災、生活圏の諸課題をあげている。

2) 地球的課題の要因としてのグローバリゼーション
 グローバリゼーション（以下、グローバル化と表記）は現代世界の特色のひとつであり、その構造や変化を捉えるために必要である。それゆえ地球的課題を理解し、その要因を考えるためにグローバル化は不可欠である。この立場から、グローバル化の概念とその特徴について整理する。グローバル化とは何か。その概念について、グローバル・スタディーズの立場からスティーガーは、グローバル化を「世界時間と世界空間を横断した社会的関係および意識の拡大・強化である」と定義づけている¹⁶⁾。この概念規定に補足説明をするならば、以下のようになろう。すなわち、グローバル化は政治、経済、文化、エコロジー（環境）イデオロギーにわたる多次元の社会的過程である。グローバル化がもっとも顕著になったのは1970年代以降であり、1980～90年代に市場メカニズムが世界を席卷するとともに情報化が急激に進展して世界の時空距離が大幅に圧縮された。その結果、特定の場所で生じた出来事の影響が直ちに世界全体に及ぶような時代がおとずれた。グローバル化は避けて通ることのできない多次元の社会的過程である。経済のグローバル化は世界全体の経済的な相互依存関係の強化と拡大であり、グローバル化の主要な側面となっている。また世界的な政治的相互依存関係の強化と拡大である政治のグローバル化は経済と直結しており経済と政治の関連性がグローバル化の特色である。そして文化のグローバル化は文化的な相互依存関係とネットワークの急速な拡大であり。これが現代のグローバル化の核心である¹⁷⁾との主張もある。さらにグローバル化した環境問題としては生物多様性の喪失や地球温暖化などがある。ここで重要なことは、それぞれのグローバル化は相互に関連している、ということである。グローバル化がもたらした負の側面は、多くの地球的課題の要因であり、それを深刻化させている。ESDにおいてはグローバル化を所与のものとするべきではない。なぜならESDでは地球的課題の要因の分析・考察のためにグローバル化は不可欠であるからである。

それゆえESDとしての高校地理も地球的課題の解決に向けグローバル化およびそのあり方を問うことをその学習内容とすべきであると考え。グローバル化に関して、高校地理教科書の一例¹⁸⁾における記述をみると、グローバル化の用語としての記述は10カ所と多い。ただそれは、人・「もの」・資本が国境を越えて結びつく動きが加速している現代社会の特徴としてのグローバル化の記述のみにとどまっている。グローバル化を現代世界の諸事象の所

与のものとし、結果として肯定するものであり、グローバル化がもたらした問題の指摘やその解決の方向性を示した記述ではない。グローバル化がもたらした格差拡大と貧困の問題は、その克服が。上述したSDGsの最大の目標であり、現代世界の大きな課題となっている。特に、発展途上国とりわけ最貧国における貧困問題の解決はESDのエッセンスであり、ESDとしての高校地理の地誌的テーマ学習の学習内容とすべきである¹⁹⁾。グローバル化は地球的課題を正しく理解しその克服を考えるESDとしての高校地理の学習の中心とすべきである。

3) システム・アプローチでとらえる環境問題

ESDの学習内容である環境問題として、IISは、水や廃棄物といった環境問題と気候変動を、「ESD実施計画」は、気候変動に加えて生物多様性の問題の特記している。環境問題は、SDの概念が成立した直接の背景であり、SDは「環境」と「開発」を、互いに反するものではなく共存し得るものとしてとらえ、環境保全を考慮した節度ある開発は可能であり重要である、という考えに立つものである。地理は人文科学であると同時に自然科学でもある。自然地理は地理学習において重要な活力ある部分を構成している。従来より、地理は人間と自然環境の相互関係・相互作用の学習を重視してきた。環境教育の多くのトピックは地理の学習内容である。人間と自然環境の相互関係というテーマである環境教育に重要な部分に深さと幅をもたらすものである。人間活動の自然環境における諸課題を学習内容としてきた地理教育へESDが導入されたことはESDの進展に大きく寄与するものである。

米国で最初の全国統一の地理教育カリキュラムの指針である Geography for life National Geography Standards²⁰⁾ (以下、地理スタンダードと表記)には学習方法にシステムの概念が導入されている。この発想は事象を個別ではなく全体としてとらえる、というものである。人間と自然を組織的にとらえるためのシステムおよび分析手法としてのシステムの導入は、複雑な関係の理解を理解を可能にする。事象の集まりをシステムとして概念化することは、その構成要素を明確にさせ、構成要素の相互関係やそのシステムが全体として他のシステムとどんな関係にあるかを明確にする、ESDとしての高校地理で取り上げる環境問題はその要因が複雑であり、その探究手法として、地理スタンダードが提示したこのようなシステム・アプローチが有効である。それはESDとしての高校地理の環境問題の学習の改善に資するものである。

上述したように、ESDとは、新しい教科ではなく、既存の教科においてその学習内容をESDの視点で捉え直すものである、とされている。これについての一例をここで紹介する。筆者はかつて、高校地理の授業で「地球温暖化」の授業を実践し報告した²¹⁾。この授業は、地理Aの主題学習ではあるが、ESDの学習として授業開発したものではなかった。この報告は「現代世界の諸課題」の環境問題として「地球温暖化」を取り上げ、生徒の探究能力の育成をめざした講義形式の授業開発とその実践について授業前後のアンケート結果をふまえまとめたものである。この授業は、大きく「地球温暖化」の実態、原因、および影響について」と「地球温暖化対策—京都議定書の成果と課題—」の二つのパートに分かれている。この授業の成果としては、多くの生徒が積極的に思考し、生徒自身の新たな探究の導入になりえたことがあげられ、課題としては研究テーマ設定能力が不十分な生徒が多く、その能力育成の必要性が明らかになった。

この授業を、ESDとしての学習にするためのポイントは、①地球温暖化の実態と原因についての気候を中心とする自然地理学習としての精緻化と②温暖化対策への国際的取組み成果と課題をグローバル化も視野にいれつつ修正する、そして③地球温暖化対策にむけての個人としてのあり方(態度・行動)を生徒自らが探究する、である。この学習内容は持続可能な開発の3つの領域である環境、社会、経済の領域に係わっており複雑である。それゆえ、その探究方法として上述のシステム・アプローチを導入することは効果的である。

4) 地域調査の意義と課題

「ESD実施計画」は、ESDの目的を「各地域の問題を解決するために、社会を構成する個々人が、各地域で環境保全や健康福祉、地域活性化・まちづくりなどのESD活動に参画し持続可能な社会を築く力を育み、「未来を築く担い手となることを目指す²²⁾」、としている。

高校地理の、生徒が居住する生活圏の地域調査は、このESD活動につながる。それゆえ、生活圏の地域調査は、ESDとしての高校地理で最も重視すべき学習である。

指導要領地理は、地理Aの大項目(2)「生活圏の諸課題の地理的考察」の中項目「生活圏の地理的課題と地域調査」において、生活圏の地理的課題とその解決に向けての取り組みについての探究学習を設定している。探究学習について、地理Aは「生徒が調査して収集した知識や情報をまとめ、それを図

表化して資料を作成し、それに自らの解釈も加えて発表し意見交換や論述する言語活動や学習成果を地域に還元するなど社会参画を目指すことを視野にいった主体的な学習活動である」としている。これは、ESDとしての高校地理の地域調査が、ESDの中心となる学習であることを示している。

地域調査には、従来より大きな課題がある。それは周知のように、学校現場において地域調査がほとんど実践されていないという問題である。この理由として、時間的な問題、交通事情の悪化、生徒が観察や考察する学習に意欲を失っている実情、さらには地理プロパーの教師の不足などがある。もっとも大きなものは、生徒にどのように地域調査のテーマを設定させ、どのように調査をさせ、そしてまとめさせるかといった、学習指導の難しさがある。筆者は、この課題の克服に向けての手がかりとして事前学習を提案した²³⁾。それは地域調査を授業と同様の探究としての学習活動と位置づけ、筆者が実施した地域調査の授業をおこない、その後半で、生徒に地域調査のテーマ設定から調査方法について具体的に説明する、というものである。具体的にはその例として「広島県府中市をとりあげ、その工業発展に伴う地域変容を探究し明らかにする地域調査の授業実践を紹介した。

ESDとしての高校地理の地域調査はESDの本質的な学習である。とりわけ調査テーマの設定への指導すなわち、生徒に、SDの視点に立つ地球的課題に結びつくローカルなテーマをいかに設定させるかが課題となっている。高校地理の指導者が、地域調査のESDとしての意義を再確認し、これをいかに実施するかがいま、指導者に求められている。これはESDとしての高校地理の最大の課題といっても過言ではない。

4. おわりに

本小論は、ESDとしての高校地理の学習内容を授業実践の視点からいくつかの留意点について検討し、明確にすることにより高校地理へのESD導入の意義を明らかにすることを目的とした。地球的課題の多くは高校地理の主題学習の学習内容である。それゆえESDとしての高校地理は学校教育におけるESDの推進の中心的役割を担っている。ESDとしての高校地理では、生徒が地理的な地球的課題の要因とその解決について探究する。そのためには現代世界の特徴であるグローバル化の問題点を取り上げることが不可欠である。環境問題は自然地理学習の重要性を再確認させ、システム・アプローチが効果的である。ESDの高校地理への導入は、ESD活

動につながり地域調査の課題を克服する契機ともなっている。高校地理へのESDの導入は、高校地理の克服すべき課題を改善できるという意義がある。

引用文献・注

- 1) 和田文雄 (2006) 「持続可能な開発」の概念の系譜－ストックホルム会議からヨハネスブルグサミットまで－ 地理教育フォーラム 第6号 pp.11-20
- 2) 「国連ESDの10年」とは、「持続可能な開発のための教育」への取り組みを推進するよう国際連合がユネスコを主導機関とし、各国政府に働きかけたキャンペーン (2005－2014年) である。
- 3) UNESCO (2005); UNDESD International Implementation Scheme. Paris: UNESCO.
https://www.bibb.de/dokumente/pdf/a33_unesco_international_implementation_scheme.pdf (2017年9月6日閲覧)
- 4) UNESCO (2005) p.29 (2017年9月6日閲覧)
- 5) 高等学校の社会系教科目でESDが導入されている教科目は、地理歴史科の世界史A、及び世界史B、地理Aであり、公民科は現代社会と政治・経済である。
- 6) 岡本弥彦 (2014) ESDの枠組みと教育実践の方法 中等教育資料③ No.934 pp.12-17
- 7) UNESCO (2005) p.7
- 8) MDGs; <http://www.un.org/millenniumgoals/bkgd.shtml> (2017年9月25日閲覧)
- 9) SDGs; <https://sustainabledevelopment.un.org/?menu=1300> (2017年9月25日閲覧)
- 10) 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議 (2006, 2011改訂) 我が国における「国連ESD10年」実施計画
<http://www.mext.go.jp/unesco/002/006/002/002/shiryo/attach/1312009.htm> (2017年9月22日閲覧)
- 11) ルツェルン宣言とは、2007年に、国際地理学連合の地理教育委員会が発表し、ESDとしての地理教育の原則を提唱したものである。
Lucerne Declaration on Geographical Education for Sustainable Development ...
<http://igu-cge.org/Charters-pdf/LucerneDeclaration.pdf> (2017年9月19日閲覧)

- なお、ルツェルン宣言に関しては、大西宏治訳 (2008) 持続可能な開発のための地理教育に関するルツェルン宣言 (全訳), 新地理 第53巻3・4号, pp.33-38 がある。
- 12) この「行動テーマ」とは、環境, 水資源, 農村開発, 持続可能な消費, 持続可能なツーリズム, 異文化間の理解, 文化多様性, 気候変動, 防災, 生物多様性, 市場経済である。
 - 13) 中山修一, 高田準一郎, 和田文雄 (2012) 持続発展教育 (ESD) としての地理教育, 『E-journal GEO』Vol.7(1) pp.57-64
 - 14) 文部科学省 (2010) 『高等学校学習指導要領解説 地理歴史編』教育出版
 - 15) 和田文雄 (2010) 現行学習指導要領が示す高校地理のありかたについて—持続発展教育 (ESD) 組み込みの意義—「地理」No.55 pp.18-22
 - 16) マンフレッド・B・スティーガー著 櫻井公人他訳 (2010) 『新版グローバリゼーション』岩波書店. Steger, M. B. (2009) *GLOBALIZATION: A Very Short Introduction Second Edition*. Oxford University Press, Oxford. p.20
 - 17) 16) p.84
 - 18) 朝野洋一ほか8名 (2016) 高等学校 新版地理A 世界に目を向け, 地域を学ぶ 第一学習社 4章 私たちが直面する地球的課題 pp.136-161
 - 19) 和田文雄 (2015) グローバル化の視点に立つESDとしての高校地理教育の教材開発にむけて, 大学教育論叢 (福山大学大学教育センター) 創刊号 pp.109-118
 - 20) American geographical society, Association of american geographers, National council for geographic education, National geographic society ed.(1994) *Geography for life National Geography Standards*.
 - 21) 和田文雄 (2010) 探究能力の育成をめざす高校地理学習—「地球温暖化」の授業開発と実践を通して—, 新地理, 第52巻第2号 pp.18-29
 - 22) 10) p.10
 - 23) 和田文雄 (2000) 高等学校地理における「地域調査」指導法の改善—教師による「地域調査」を用いた事前指導をてがかりとして—『広島大学附属福山中・高等学校中等教育研究紀要』第41巻 pp.71-76